

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～岡山県～

- ・教員の英語指導力の向上（小学校英語教科化に向けた取組・言語活動の高度化に向けた取組・情報共有）
- ・教員の英語力の向上

教員研修の強化（内容精選・英語推進リーダーの活用等）、教員の外部検定試験受験の促進

取組の内容

- ①小学校英語教科化に向けた取組
 - ・小学校英語拠点校事業
 - ・小学校外国語リーダー研修会
 - ・小学校外国語新教材説明会
- ②教員の英語力の向上
 - ・教員研修におけるTOEIC IPの受験
 - ・外部検定試験受験支援
- ③指導と評価の一体化に向けた取組
 - ・英語教育推進リーダーの活用
 - ・英語指導パワーアッププロジェクト



成果②

授業における教員の英語使用状況の向上

	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
中	28.4%	39.6%	50.3%	61.2%
高	41.3%	32.4%	37.0%	76.6%

平成26年からの4年間で、中学校は28.4%→61.2%(+32.8ポイント)、高等学校は41.3%→76.6%(+35.3ポイント)を達成。

成果①

教員の英語力の向上

	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
中	20.3%	23.1%	29.1%	30.4%
高	51.6%	55.6%	60.2%	76.9%

平成26年からの4年間で、中学校は20.3%→30.4%(+10.1ポイント)、高等学校は51.6%→76.9%(+25.3ポイント)を達成。

成果の波及・周知

- ・公開授業でのティーチングモデルの提示
英語教育推進リーダーによる授業を公開授業で示し、参加者が勤務校において伝達・普及を図る
- ・研修・連絡協議会等での周知
英語担当教員や管理職対象の研修等において周知、好事例等の共有を図る

課題解決の手だて

- ・「CAN-DOリスト」の把握・公表に対する好事例等を、研修等で扱い周知する機会をもつ
- ・パフォーマンステストに関する研修の更なる充実を図り、情報共有やワークショップ等の内容改善を行う
- ・小・中・高の一貫した連続的な英語教育についての周知・徹底

課題

「CAN-DOリスト」の活用状況、パフォーマンステストの実施状況改善

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～玉野市立玉中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ①岡山県学力・学習状況調査により判明した「書くこと」の課題の解決に向けた手立てとして、「語句や重要文の習得」「語順の習得」「まとまりのある英作文練習」の指導の工夫を行う。
- ②個々の学力差が大きいという課題の解決に向け、習熟度別少人数授業の充実を図り、個に応じた指導を行う。

具体の取組の内容

①「書くこと」に対する苦手意識をなくすために、「書くこと」の活動を増加させる。

- 語句や重要文の習得：しゃべり007(口頭でのQ&A練習)、家庭学習と小テスト(語句の定着)、振り返りシートでの短い英作文(重要文の定着と自己表現練習)等の活動を繰り返し、「書く」ことに慣れさせた。 ※主に帯学習での取組
- 語順の習得：英作文ジャンプアッププリント(語順学習)を用いて、日本語と英語の語順の違いを学習させた。 ※集中的に5時間程度で実施
- まとまりのある英作文：1～2年時から取り組んできたPicture Description(絵や写真を見て口頭で説明する活動)を、3年からは「話して書く」活動へ発展させ、話したことを書くことで、「書くこと」への抵抗感を少なくするようにした。
また、1年生は「自己紹介」、2年生は「私の夏休み」、3年生は「玉野の紹介」や「日本の文化を伝える」等の身近な題材で条件英作文に段階的に取り組み、実際にALTや地域を訪れた海外の人に伝える機会を設定することで、興味関心を高めた活動ができた。

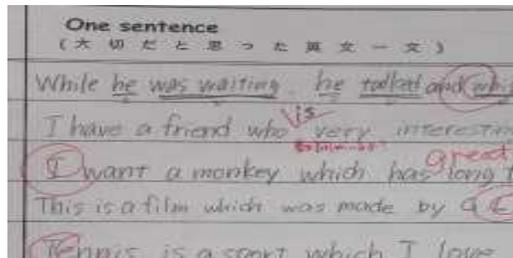
②学力差に応じた指導

- 習熟度別少人数授業により、基礎コースでは丁寧な指導と繰り返し練習を中心とした基本表現の徹底に努めた。標準コースでは、基本表現を用いて、英作文させる機会を多く持たせた。また、2年生の広島平和校外学習の機会を利用し、グループによる教え合い学習の一貫として外国からの観光客に話しかけ、平和メッセージをもらう活動を行った。
- 発展的な取組として、放課後学習では英検の英作文対策等を行い、資格取得を目標とした書く力の向上にも取り組んだ。
また、玉野市に観光で訪れた外国人に英語で案内をする「たまのステューデントガイド」では、学んだ英語を実際に使う場面を作ることができた。

成果①

「書くこと」への抵抗感の減少

- 振り返りシートに英文1文を毎時間記入する活動を続け、最初は例文を書き写していた生徒が複数名いたが、現在は全員が学習した表現を用いての自己表現英作文ができるようになった。



成果②

意欲の向上

- 条件英作文では、目標とする30語を大幅に上回る100語程度の英文を書く生徒が全体の3割以上になった。
- 中3の3分の2の生徒が英検受験に挑戦し、学年の50%が3級を取得した。さらに準2級や2級に挑戦し、合格した生徒もいる。
- 「たまのステューデントガイド」への参加率は全体の約40%を占めており、市内他校の2倍の参加となった。



今後の課題・方向性

- 既習表現を自己表現として使える力の育成
生徒の語彙力を高めるとともに、知っている単語・文を駆使して英作文する力を育てる必要がある。
- 生徒の意欲を高める題材の研究
コミュニケーションへの意欲や必然性を高めるために、実態に応じた題材を扱うことが必要である。
- 「思考力」と「書く力」の育成
「書く力」と同時に、自分の思いや考え等の内容を充実させるための手立てが必要である。
- 表現の正確さの向上
伝えたい内容を正確な英語で書くことができる力を身に付けさせるために、より多くのインプットを行い、アウトプットにつなげていくようにすることが必要である。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語に対して苦手意識を持っている生徒が多い。授業に積極的に取り組むことができるように活動を工夫する。
- ・英問英答を苦手としている生徒が大半である。英語を視覚化することで生徒の理解を助ける。

具体の取組の内容

公開授業研修講座

- ・授業に興味を持てるように公開授業で様々なボランティア活動を視覚化した。
- ・英単語の理解を助けるために単語を視覚化してイメージしやすくした。
- ・本文の内容をイラストにすることで内容をイメージしやすくした。またイラストを使用することで英問英答を容易にした。
- ・インタビューを通して生徒同士が英語を使い、積極的にコミュニケーションをとれるようにした。またインタビュー時に英語に直すことができない難しい単語は絵に描き直すことで相手に自分の意見を伝えるように工夫した。

成果①

・生徒に対してアンケートを1学期と2学期に実施した。その中のアンケート項目で「授業に興味を持って参加していますか」という項目があるが、1学期は肯定的な意見が80%台のクラスも2学期のアンケートでは同項目でも90%を超えていた。またあるクラスでは肯定的な意見が100%であった。
このことからブリティッシュカウンシルで習った活動を毎時間授業で取り入れたことが生徒の興味関心を高めたのではないかと推測する。

成果②

・4月当初より本文の内容をより積極的に理解しようとしている生徒が増えたように見られる。
・以前より英語を使って自分の意見を表現しようとしている。また英語で表現することが難しい場面では絵に描くことで相手に伝えようとするようになった。

今後の課題・方向性

・生徒の英語力をさらに鍛える必要がある。具体的にはリード&ルックアップなどの活動をすることや活動を時間内に終えるように時間管理ができるようになることが挙げられる。
・グラマーやリスニングの活動で本校生徒の実態に合った活動を探していく。
・一つ一つの活動をもう一度見直していき、今よりもお互いにコミュニケーションをとれる機会を増やしていく。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・コミュニケーション活動も大切だが、知識の定着が不十分な生徒もいるため、習得と活用の両方を大切にさせる。
- ・知識を深い思考に結びつけられていないので、理解したことを自分の問題として捉え、自分の言葉で表現させる。

具体の取組の内容

校内の英語科共通の取組

- ・教科書のレッスンの中で、学習した知識を活用する場面を取り入れる。
- ・活動を行う際は、複数の技能を統合し、それ自体に必然性があるものを取り入れる。
- ・インプットとして得られた情報(概要・要点・話し手や書き手の意図)を整理する活動を行う。
- ・人に情報を伝えたり、自分自身の考えをまとめて伝える活動を行う。

公開授業研修講座

- ・授業の導入部分で、これから学ぶ内容と自分自身の生活を結びつけられるようにした。
- ・本文中の新出語句・表現の確認を授業の後半に持つてくることで生徒に意味を推測する時間を十分に与え、記憶に残るようにした。
- ・本文をわかりやすく書き直したものを読ませて新出語句・表現の言い換えに注目させることで、より記憶に残るようにした。
- ・宿題として本文の音読をさせることで、十分な量のインプットを確保した。
- ・メモを取ることで要点を考えさせ、その後の本文再生活動につながるよう指導した。
- ・本文の多様な言い換え表現に触れさせることで、自分の言葉で本文を再生する支援を行った。

成果①

- ・小テストや定期考査の結果から教科書で学んだ語句・表現の定着率が向上している。
- ・本文の再生活動を設けることで、目的を持って音読を行う生徒が増えている。
- ・英語で話したり書いたりする際に、学んだ語句・表現を使う生徒が増えている。

成果②

- ・教科書で扱う題材と生徒自身との関連性を考えさせたり、明らかにしたりすることで、授業に意欲的に参加する生徒が増えている。
- ・英語で話したり書いたりする際に、教科書の内容を自分で言い換えて表現する生徒が増えている。
- ・英語で話したり書いたりする際に、単に教科書の内容を再生するだけでなく、最後に自分の意見を付け加えるなど、自分の考えを表現する生徒が増えている。

今後の課題・方向性

- ・自律的な学習者を育成するために、教師主導ではなく、生徒が中心となったある程度の自由度がある授業の展開を考えていく必要がある。
- ・教科書で扱った内容と同じ内容の文章を積極的に取り入れることで、言語形式のさらなる定着が期待できる。それが「生の素材」であればなおよい。
- ・英問英答を行う際には、言い換えを行うなどの工夫をすることで生徒が本当に内容を理解しているかどうかを確認する必要がある。
- ・予習を課さない授業を行う際は、復習に重点を置き、そこで何をさせるのかを考えておく必要がある。